

おすすめします！私の選んだこの一冊！

政策情報誌「Think-ing」第16号の編集に携わった編集委員から「おすすめの書籍」を紹介いたします。各書籍とも、実際に編集委員が読んで課題解決のヒントを得たり、業務の参考としたりした実績のある1冊です。皆さんも、ぜひ御一読ください。



**データでわかる
2030年の日本**
三浦 展 著／洋泉社

日本の社会が高齢化していることは誰でも知っている。ところが、それをきちんと数字でわかっている人はいない。特に若い世代は、自分もいつか高齢化するということが実感できていないと著者は警告する。

日本で最も人口が多い団塊世代（1947～49年生まれ）は、2030年になると、80歳を超える。そのとき、団塊ジュニア世代は50代後半、しかし、団塊ジュニア世代を支える若い人は減るばかり。行政職員はもちろん、日本人として知っておくべき今後の日本社会の姿が本書に凝縮されている。

今までの仕組みが通用しない社会がすぐそこまできている。本書は、人口、高齢化、少子化、未婚化に関するデータを図表やグラフで示し、簡潔かつ明確な解説とともに、問題解決の糸口を提示してくれる、まさにこれからの時代・社会・市場を考えるための教科書である。

（八潮市・小倉 紀子 編集委員）



**すべての仕事を紙1枚に
まとめてしまう整理術**
高橋 政史 著／クロス
メディア・パブリッシング

あるプロジェクトに関わる機会があり、その進め方や目指すべき帰着点にあれこれ悩んでいた時に、ふと目に止まったこの本。仕事は整理して初めて前に進めることができるという原則を説き、整理するためのフォーマットを7つ紹介している。

紹介されているフォーマットはとてもシンプルで、持続的に取り組めるものが多い。仕事術に関する本は、得てして精神論に終始するものが多いが、著者が編み出したシンプルな「フォーマット」として提示しているのが、実践しやすい上に、継続して取り組むことができる。

公務員の職場においても職務の効率化が厳しく求められている中で、スピード感のある仕事を目指す時、その一助となるのではないだろうか。

（ふじみ野市・黒田 英司 編集委員）



頭がいい人の敬語の使い方

本郷 陽二 著／日本文芸社

日本語を日本語たらしめる要素、その一つが「敬語」である。相手を敬い尊ぶために、様々な語句や表現を使い分ける。日本人のDNAには、「相手への思いやり」が強く刻み込まれているのだろう。だが、それゆえの難しさもある。最大限の敬意を払ったつもりが、ほんの小さな誤りで逆に相手を貶めてしまった。そんな経験がある人も少なくないのでは。

本書は、そんな「敬語」について基礎から説明しているだけでなく、よくある誤用や間違いやすいポイント、さらにはよりスマートな用法まで紹介している。電話応対から上司との日常会話まで、場面もかなり細かく設定されており、読んだその日から実践できる。行政に携わる以上、正しい敬語は必須である。本書を活用し、ぜひ身につけていただきたい。

(上里町・中里 和宏 編集委員)



ソーシャルデザイン 実践ガイド

梶 裕介 著／英治出版

最近、耳にするようになった言葉「ソーシャルデザイン」。
人口減少、高齢化、中心市街地の衰退など社会を取り巻く課題は、多種多様である。そんな社会が抱える複雑な課題に対して人間の創造力で解決策を考える「ソーシャルデザイン」について、本書では7つのステップに分けて図や写真を交えながら分かりやすく解説している。

本書で著者は、各企業、自治体での取組事例を交えながら、ソーシャルデザインの起点は「人」であると考え、「社会課題と人の関係を忘れてはいけない」ということを提言している。

自治体職員は机上で物事を考えることが多く、「誰のための施策なのか」を見失いがちであるが、本書は、その目的を改めて見つめなおすきっかけとなるとともに、今後、様々な社会課題に挑む上で、行動につながる原動力になるため、ぜひ読んでおきたい1冊である。

(埼玉県・小林 直樹 編集委員)



図解マーケティング の教科書

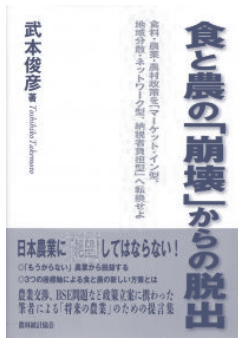
日経デジタルマーケティング×日経ビッグデータ 著／日経BP社

本書はマーケティングの基本から最新トレンドまでを、29のキーワードと先進企業のケーススタディ等で分かりやすく解説している。

特に、先進企業のケーススタディにおいては、担当者がどのような考え方に基づき、マーケティング知識をビジネス上の現実に即して応用してきたかを学ぶことができる。

「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何者でもない」という言葉がある。本書で紹介されているケーススタディを行政実務にそのまま適用することには困難があろうが、各事例のエッセンスを行政実務に組み合わせることで、新たなアイデアを創出することは十分可能であり、かつ有益であると考えられる。行政実務を担う上でも、一読の価値ある書籍と思われる。

(埼玉県・澤田 直樹 編集委員)



食と農の「崩壊」からの脱出

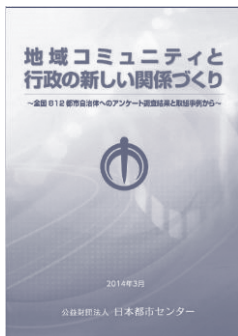
武本 俊彦 著／農林統計協会

現在の日本の農業は、食料自給率の低下、農作物の輸入自由化、減反政策、農地の減少など様々な課題がある。

本書では、これらの課題について明治時代以降の農業と国の政策の変遷を踏まえ論じている。また、今後の農業のあり方について、市場ニーズに対応した「マーケット・イン型」、農山漁村の6次産業化などによる「地域分散・ネットワーク型」、補助金により農家の所得を保護する「納税者負担型」を軸とすることが必要であると提言している。

これからの農業政策について、どのような方向性で進めるべきか考える上で、基本として押さえておきたい内容であり、初めて農業行政に関わる担当者にぜひ一読してもらいたい。

(埼玉県・小林 照明 編集委員)



地域コミュニティと行政の新しい関係づくり

~全国812都市自治体へのアンケート調査結果と取組事例から~

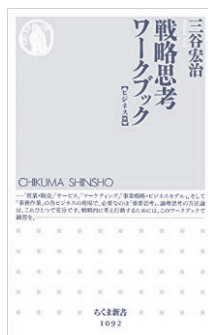
公益財団法人日本都市センター

少子高齢化や人口減少など、自治体を取り巻く環境は大きく変化している。こういった変化の対応策の1つとして、「参加」と「協働」を政策課題に取り上げ、その主体となる地域コミュニティを活性化させるため、様々な取組を行っている自治体がある。

このような状況を踏まえ、日本都市センターでは、全国の都市自治体を対象に「都市自治体における地域コミュニティと関係施策の実態」のアンケート調査を行った。調査結果を分析し、地域コミュニティ施策の傾向や課題の考察を行い、その結果を本書で報告している。

また、本書は、自治体や民間団体がコミュニティ活性化に取り組んだ事例も紹介しており、今後、自治体が、地域コミュニティを活性化させる施策を考えるうえで、参考となる1冊である。

(人づくり広域連合・細木原 章子 編集委員)



戦略思考ワークブック【ビジネス篇】

三谷 宏治 著／ちくま新書

感情的にはなく冷静に、主観的ではなく客観的に、バラバラではなく整理して、ちゃんと伝え、聴き、話し合う。そんな風にできたらいいと常々思う。

本書では、そのようなやり方を『重要思考』と呼び、「1. 重みと差で考える」、「2. 目的や意思決定体を明確にする」の非常にシンプルなステップでそれが可能となる、としている。

「重み」とは「何が大事か」ということ、また、「差」とは他と比較して「何が優れているか」ということ。そして、「意思決定を明確にする」とは、誰にとっての「大事」なのかを考えることである。

「営業・販売」「サービス」「マーケティング」「事業戦略・ビジネスモデル」「事務作業」の切り口から重要思考を学べる、実務に即した論理思考の教科書であり、問題集である。皆さんに一読をお勧めしたい。

(人づくり広域連合・佐藤 光敏 編集委員)